

武家名目抄

職名部

十五

和書門	
二五二の六	類
七	函
七	架
四五六	冊

内閣文庫	
二五二の六	和書
四五〇六	類
四五六	冊
一〇	架

内閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457 (16)
函號	153 275



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



武家名目抄

奉行人

武家名目抄第十五冊

職名部七上

奉行人

吾妻鏡云文治二年七月廿八日癸卯帥中

納言奉書到來新日吉領武藏國河肥莊地

頭對捍去々年乃貢事略中河肥事者請所也

但領主幼少之間如請新事有不法事歟差

別奉行人可合致嚴密辨之旨被遣御書於

武藏守之許云々俊兼為奉行あり人
は地以の外に乃其を所幕府のまり者なり

又云建久二年正月十五日甲子被行政所
吉書始略中公事奉行人前掃部頭藤原朝臣
親能筑後權守同朝臣俊兼前隼人佑三善
朝臣康清文章生同朝臣宣衡民部丞平朝
臣盛時左京進中原朝臣仲業前豊前介清

原真人實俊四年十月廿一日甲寅諸御領
乃貢結解勘定事奉行人等於私宅遂其節
之由有風聞之間甚不可然至今日以後者
於政所可致沙汰之旨被仰云々六年十月
一日壬子武藏国以下御分国所課本所乃
貢事可致不日沙汰之旨有嚴密仰而今年
土民等愁申損亡事等間定難有合期進濟
歟之由奉行人右衛門尉能員散位行政等

申之
同脱漏云嘉祿元年九月廿日戊寅武州召
集奉行人等令對面給有被仰含事各賢不
肖付而可被加賞罰之由云
吾妻鏡云文曆元年七月六日仰家司等召
起請是奉行事不謂親疎不論貴賤各存正
儀可致沙汰之趣也其衆十七人前山城守
藤原秀朝前山城守中原盛長散位大江以

康散位三善康持民部大丞三善康連中務
丞大江俊行彈正忠大江以基大膳進大江
盛行左衛門尉惟宗重通兵庫允三善倫忠
藤原賴俊沙弥行忍惟宗行通三善康政
宗〇按小の内云善康連も評定元亨其
餘十六人の評定傳子兄元亨子政所考
人付了建長と存り所謂
引付了のありし也
新式目云弘安七五引付元并存行事右引
付元殊專清潔可勵恭奉行人為庶直取

忠勤去充可被賞既并奸心現私曲者永不
可召任仍引付忠否奉り曲直頭人不憚可
人不及緩怠遲可注申也引付外奉り人
政所問注所執事可申沙汰矣此亦引付
引付人の事引付人及問注
及引付人の事引付人及問注
申り後より引付人及問注
又云弘安十一年依諸人沙汰事殿中人不
可遣使者於奉行人許事

東寺文書云常陸国信太在雜掌定祐申初
崎郷年貢事心中二年以來對捍自由就許
申度尋下し上去年八月八日以奉り人等
使者雖お解年音難知糸多理所取致
未遂結解可合究滴狀依仰執達如件元
德二年九月十九日遠江院理亮殿お摸守

判右馬指頭在

太平記云官軍政六六波羅勢ノ中ヨリ

年ノ程五十許ナル老武者馬ヲ閑ミト歩
ヤテ高聲ニ名乗ケルハ其身愚蒙ナリト
イヘトモ多年奉行ノ數ニ加ハリテ未席
ヲ汚ス家ナレハ人ハ定テ筆執ナレト侮
テアハ又敵トソ思ヒ給フラシ然トイヘ
トモ我等カ先祖ヲ云ハ利仁將軍ノ氏族
トシテ武畧累葉ノ家業ナリ今某十七代
ノ末孫ニ齊藤伊豫房玄基ト云者ナリ云

云按の上り條ニ
海のまりくる海客

東寺文書云東寺雜掌光信申周防国美和
在內互行方乃眞事重訴状ぬ此不應法下
知并度ハ書云ハ所遣奉行人使者や不
日可被突満ニ状依位執達ぬ件康永三年
十二月四日曾我六郎右工門尉殿散位

又云山城国紀伊郡散在田畠
料所明年寺所作所預置高藤辰一九也早
賀来法事為
眼跡

市新左工門尉お共可被沙汰付下地之状
依仰執達如件貞和四年十二月十八日小
串下野権守後武藤守藏藤民部丞
園太曆云文和元年二月廿七日武家奉行
人誅方大進房圓忠来予決断所奉行之時
奉行人也依得舊好時之来也按誅方大進
房為建武一
鏡の時難所決断可候
是利家所決断可候
又まりの候に補と
り

後愚昧記云貞治五年八月十八日攝州并
若州寺社本所領寺事守護未補之間下遣
京都奉行人各一同沙汰付云々
花營三代記云應安四年七月九日石清水
八幡宮三所神殿造營事始公家右中辨藤
原宣方職事權右少辨俊任右大史三善家
連史生官掌武家御使波多野肥後守通卿
奉行人布施彈正大夫入道依田左近大夫

入道中澤掃部大夫入道雅樂左近入道飯
尾美濃守飯尾左近入道雜賀縫殿入道門
真權少外記諏訪左近將監安成新左衛門
尉抄波多野通郷
太平記云青砥左夫政道ノ為ニ怨ナル者
ハ無禮不忠邪欲功誇大酒遊宴拔折羅傾
城雙六博奕剛縁内奏サテハ不直ノ奉行
也治世ニハ是ヲ以テ誠トセシメ今

ノ代ノ為躰皆是ヲ肝要トス我コソ悪カ
テメ些禮義ヲモ振舞極信ヲモ立ル人ヲ
ハアラ見ラレスノ延喜式ヤアラ氣詰ノ
色代ヤトテ目ヲ引仰ニ倒笑ヒ輕謾ス
又云神南合北當タル峯ニハ大将義詮
朝臣ノ陣ナレハ道譽則祐以下老武者頭
人評定衆奉行人其勢三千餘騎油幕ノ内
ニ布皮ヲ敷キ雙ハ袖ヲ連テ並居タソ

伊勢家記云應永廿九年正月十一日御評
定始爰領有仕其外頭人奉行人有仕仕
建内記云正長二年七月六日奉行人飯尾
肥前守為種為御使入來謁見制札姓尸間
事有被尋下之旨奉行人古來書制札之時
依仰下知如件卜書之次行二年号月日書
之次行三官姓尸判載之五位六位共以如
此規式也而勝定院殿近年仰曰載尸之條

限四品人欵奉行人等書載之不叶道理可
略之由有仰近年不載之頗背先例稱某朝
臣之條四品人事欵若思食互哉然而不及
申直之仍當御代各可被狂先規哉由奉行
等申管領之處可披露之由被申之間今日
為種伺申處可否面々可尋申由有仰一紙
可注獻云々後日一紙注愚意付為種了六
位外記成上宣旨時略尸欵事相尋常定之

處先規略戸云々久安案文寫送之五位外
記必載戸也記錄所文殿勘文五位以上載
戸六位略戸案文等一見了
東寺文書云除免東寺領当国所々大奉
幣米爭先々為免除、地旨奉行奉書如此
可被止催促之由也仍執達此件永享元
十二月廿五日山城国大奉幣米大使在中
左衛門督久満判ハ按ハ福倉殿ハよりハ奉ハ大ハか

川のハ付ハりハしハてハはハるハ多ハくハ、ハなり
建内記云永享十一年六月廿五日辛丑傳
聞武家諸奉行人々愁訴雖經數年不及披
露近日雖訴之或稱管領命越次第披露之
不可然不依尊卑親疎任次第可伺申由有
仰云々又聞諸家被尋下有愁訴入云々
康富記云嘉吉二年八月廿八日丙辰或語
云飯尾肥前入道永祥者評定衆也去廿二

日御評定始曰與頭人波多野出雲守座席
令相論也為評定衆上者任位階上首可著
頭人出頭上之由肥前申之出雲申云雖為
衆為奉行人之間不可著頭人上候間可著
肥前上之由出雲守募申之於去廿二日者
出雲守著肥前上云々今日之事兩方及對
論所詮任位階上首為衆者可著頭人上之
條有支證之間諸奉行一味同心申此子細

候云々仍出雲守俄然一級支被執申今日
著肥前入道上云々三年四月十三日戊戌一
昨日松尾國祭也於東寺西邊神幸時駕輿
丁神人等及喧嘩數十人手負死人在之仍
神輿或射立矢血氣穢神輿總而六基也悉
奉振奔路次田頭云々然間今日奉行飯尾
肥前入道永同加賀入道真齋藤上野外基瀬
等檢使參向奉檢知之三基觸穢之由歸參

申管領畠山殿云々按波多野出重守人評
事故評定有多野出重守人評
文安年中御書帳云奉り有松田治部奇藤
誣訪中澤清飯尾布施本雜賀評定有按
津波多野二階堂町野
蜷川家記之敬白起請文事一御成敗ノ趣
万一不計理取子細立之ニ不貽心慮言上
仕綴於当坐雖不存有思案仕出ノ旨

不謂違期可申上之但至堅固不并越度去
非沙汰之限事次就公事不可存無沙汰事
一雖為他人奉行御裁許之篇目有違之由
承及之可申披之者對中沙汰者人可申
之事付就沙汰公事篇不可辨虛右有條
今違犯去日本國中大小神祇八幡大菩薩
山王二十一社天滿大自在天神法罰各可
罷蒙及仍起請文如件長祿二年五月十八

日左工門尉三善為衡民部丞藤原親基右
工門尉藤原種基左工門尉三善元連散位
三善貞有和泉守清原貞秀河口守藤原国
通散位三善く種加賀守三善く清沙弥如
令丹後前司平秀與沙弥玄良下野前司三
善貞基下総前司三善為教沙弥常忠以上
十五人
悲立判
新撰長祿寛正記云寛正二同年九月十一日都二

壬土一揆オコリ所々寺社領其外富タル
人民ノ家へ亂入放火シテ財寶ヲウハヒ
トル時ノ奉行飯尾左工門大夫布施下野
守承リ所司代多賀豊後守ニ被仰付テ是
ヲ退治セリトス
蜻川親元記之文明十七年八月十五日癸
巳寺切礼出仕飯尾大和入道法備中入道
奇藤大蔵入道法式部大夫飯尾美濃入道

飯尾左衛門六支 諏訪信濃守松田對馬守
飯尾与三左衛門尉松田左衛門六支 飯尾
三郎右工門尉松田對馬孫三郎飯尾新左
衛門尉以上法御前未系流長門入道
治幼四郎左衛門 諏方弥次郎依田中務丞
飯尾右京亮法四郎雜賀善次松田八郎高
藤四郎高藤氏部丞飯尾又六飯尾高次郎
諏方次郎飯尾弥六飯尾加賀四郎未系流

とつゝ「政所同所」のあき松小判を但司付不
小補をりまう者もつゝ恩賞松小判を但司付不
列しとまをまはし多と「書」か
其由「篇末の按中」にあり

宣秀卿記之法教書案の應六年三月廿三
日除目下行三ヶ束方略以上四千疋方用
脚を為節會熱用内甘露寺中納言元長傳
奏被遣一切着下行武家奉門諏方六支將監
也
和長卿記云文龜三年九月十四日參室町

殿其子細者公領左衛門府領田内船岡田
地七段事當年九月西郷三河入道号馬上
免掠申給御下知之間以左衛門督為廣申
入子細之處被聞食披即被戒御下知畢自
奉行松田豊前守書出之
永祿六年詔叙附之奉切元飯尾加賀守貞
廣飯尾大和守竟連御方信濃守晴長中澤
備前守光俊松田丹後守藤弘飯尾中務大

輔盛就治部大藏丞光重松田左工門大支
頼隆治部三郎左工門尉藤通松田主計久
光秀飯尾共左工門尉為忠評訪神弓衛俊
郷中澤玄若久松田又次郎御方神四郎布
施弥太郎
室町殿日記云方保許就東福寺行者常能
田地沽却之矣去年在東京之柳遂亂以奉切
元一被末尋以塔頭より不届横被中級

いふ所或ある山に後々昔より上裁例
不流及び方を案の故り哉多の元及重
而遂討改愚法に宛究可申及聊非疎略
以上八月廿三日上野民部少輔及進士美
作与后義與

義昭將軍法及附云奉り元御方信濃守晴
長飯尾加賀守盛就飯尾右馬助貞遥御方
神兵衛尉俊御松田九郎左衛門尉頼長二

階堂山城守晴泰波多選五郎通秀大館
上総介氏虎一色七郎勝貴竹田梅松軒春
波宮内大輔国任後号坂田〇按二階堂波多
とこの村室町家衰微し一列の共殘を返けきま
あよなき下のみりの中ふはらうりしりみは氏に
あふまうもよふつる家や道しとけの左國しと東
みあつりうあふこふまこさうけの小竹田者海のみさ
せりの家ふあとまたりまり
小竹田とは

常照愚草云奉り元を右守方より事な
りとし事法大名あふ又美の事なりと云

之在之間亦事方と中事可然の殊に引付
方又評定亦事被る如く一服の事也
想談治要云凡奉行人天下れ公事と里
おこる小残うもるる政道の善悪もと
とては事しよらるるいふこと正也
とて私を存きん思向をちまへん事
時一理非少もるる具負をいふ事
ともしきなりくと稱まへん事

ちやまらもるる事なりとて決一つ
かゝる事なりとて貞永式目小の事
れ侍る方の方の支證をま令究決きぬ
理ありてはけり進つるをもとに給人
そく難居をいふ事なりとて罪科小
支さる事なりとて存知
し如く事ありてはけり
裁度なりとて事なりとて具

夏をいたしつゝおとくうらふたをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事

又法人の然らば後急小過つゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事
なりて試誦をうへつゝおとくをいれつゝ公事

の賄賂の如きるを以ての班墮と云ふは
の操を正路と云ふはさきまりの事なり
列して臨時の節度ありついでに後昆の忠
勤をきくもんりうにねおをわ

世鏡抄云奉行之支萬事ニ我欲ヲ離テ為
君欲ナク理ニハ理ヲ添ヘ非ニハ非ヲ添
ヨ負ト福ト理非ヲ以テ同ハ負ニ付ヨ但
非大儀ナラハ不及力私ニ少ニ以詞扶之

謀叛人ノ末ナリトモ度々忠アラハ召出
セ忠勤ノ侍ナリ共度々不忠アラハ追竄
テ不用之可誅也去ハ故人云ク奸臣在朝
忠臣不進庭美女在国悪女恠夫ト云リ智
者在朝家則愚人必讒訐スト云ヘリ相構
相構可守之也

按以上は四條の事なり

花營三代記云應安四年十二月卅日門真
權少外記被加召関東奉行訖

香取大祢宜文書云下從國香取社社人長
房實公等申当社領香取郡大槻郷内神田
畠等事在御教書御事書一旨山名兵庫大
夫入道有共茲彼河沙沙付下地於長房等
及早仍渡狀此件應安七年十月十四日沙
弥道徹判曰文章沙弥智兼判避渡條一
實持實秋跡自作田并所務事一夫雜役事
一諸神宮訴訟散在地半多事一死亡逃亡

跡事一國行事取并良田所事一地以知行
内所務も任先例教密可令沙沙社家事右
於國行事殘者避渡中社家も向後不可成
違乱煩及仍避狀此件應安七年十月十四
日式部丞政氏判此避狀而使封裏書銘了
裏書云關東奉行人安富方藏入道山名兵庫
大夫入道應安七年裏封了○此道徹、此男
入道智兼、此心名入道有、又政氏
、千葉家の代官國城方氏なり
空華日用工夫集云應安四年二月十四日

聞官使奉行明石泊侍所入圓覺首坐寮捕僧二人而皈云々

又云至徳三年三月二日關東奉行明石將監書至盖傳幕府之命也
頼印僧正繪詞云義政禪僧ヲモツテ兩将ハ申テ云某降ヲユルサレハ出家シテ大衣ヲ着スヘト然ハ若天丸カ出仕ヲユルサルヘシヤ兩将出仕シテ此ヨシ披露信

用セラレストイヘト毛布施入道得悦ヲ奉行トシテ御教書ヲナサル

東乱記云持^氏給^條上杉安房守數万ノ軍勢ヲ引率同四日上州ヲ打立同月十九日ニ分陪川原ニ着玉ヘハ御旗本ノ人々御内外様ノ侍奉行頭人ニ至ルコテ公方ヲ捨置申憲實ノ勢ヘソ馳加ハル

鎌倉年中行事云奉行入數六人壹岐明石

布施雜賀清寺岡 抄上十條、禪名、方家のまり人

官地論之御使給報書急立皈捧政親御前

槻橋三位房參御前畏讀上鳥素嶺雲橫藍

関雪擁無往復之使虜青鳥飛來投一芳札

高顧之至珍重、雖為多端令省略候畢

誠恐誠惶敬白林鐘上旬八日富樫御奉行

中木越磯部判

赤松祀之永正十四年三月七日法屋形様

休去き人様成はるか、抄上十條、禪名、由緒不承

及間可被返下事不承、抄上十條、禪名、孫女儀

多々及間連下作とつ語事、抄上十條、禪名、其時之云

高田を之、抄上十條、禪名、其時之云

外志水孫左衛門清実衣呈左京亮朝親

猿橋左衛門守則高は三判、抄上十條、禪名、永正十五年

七月おき、抄上十條、禪名、本書及信長記、抄上十條、禪名、

了稱、抄上十條、禪名、故に事、抄上十條、禪名、三、抄上十條、禪名、

下りり四なり五なりなりと
ふも皆ふきしりかか

信長記云信長公尾張国ノ守護ハ武衛斯波ト

申奉ル數代相繼テ彼国ノ刺史ニ備リ玉

フ其頃ハ尾張ハ郡ヲ半分ニシテ上四郡

ヲハ織田伊勢守信安守テ岩倉ト云所ニ

在城ス下四郡ハ織田大和守下知ニ隨ヒ

シカハ清州城ニ武衛公ヲ居申我身モ城

中ニ在テ守護ニ奉ル彼大和守下ニテ三

奉行ト云シハ織田因幡守同藤左衛門尉

同彈正忠也

賀越鬪諍記云州御所越濃爰ニ義秋將軍濃

州織田上總今信長ト被仰合濃州ハ御越

可被成ニ付永祿十一年七月十六日ニ一

乘ノ谷ヲ出御ナル去レハ此信長殿ト申

ハ武衛ノ御内衆ニテ古ハ越前ニ在國

有ニ力尾張國ノ奉行四人ニ被仰付ニ其

一人也

又云於棗莊太窪永祿四年四月六日三朝

倉左衛門督義景棗、莊依太窪犬追物有

之中略時ノ奉行同名玄蕃助景連、河尻、

道場ニ居セラルル次日屋形ハ出仕アリ

安土日記云天正二年三月十二日信長御

上洛十七日坂本ハ被_レ成御渡海相國寺始

テ御寄宿南都東大寺蘭奢待御所望音帝

王ハ御奏聞之處泰_ニ則三月廿六日御勅

使_リ翌日廿七日信長奈良之多門ニ至

テ被_レ進御座御奉行人塙九郎左衛門菅屋

九右衛門佐久間右衛門柴田修理亮丹羽

五郎左衛門蜂屋兵庫頭荒木攝津守夕庵

友閑重御奉行津田坊上以三月廿八日辰刻

御藏開候訖

水戸系王院文書云就下今度天台宗与真言

宗指衣お論之儀使僧中道院より上り則其
理禁裏へ申合處去年七月彼真言宗申出
論旨を奏聞お違ひ子細お指衣着用之儀
も更年勅許お採申条為曲事次第之由既
被成法沙汰お弁破之可被成下論旨之由
お然處信長お法公事法度被お定立り五
人お間重お可被歴沙汰之旨お先年別儀
之趣為之得深筆之也七月三日江戸幕王

院口法蓮院殿抄記天正三年
法湯殿上日記云天正三年七月廿四日か
は五人お系之てんゆの事ソんのちゆ
おの事若宮のおう大上の事ハハ
月四日五人おはのれは三て系之て天
台真言の之の事おつきく錦音の案と
七色おはけのあはれ
安土日記云天正七年十二月廿二日親王

様二條新御所へ御移徙トシテ行啓云々
奉行村井長門守丹羽五郎左衛門長岡兵
部大輔惟任日向守也次ノ日信長被御金
銀其外進上候也
勢州軍記云諸將會合而欲立信長嗣先立
兩大將信雄者移清州城尾州八郡諸士屬
之信孝移岐阜城美濃八郡諸士屬之以柴
田羽柴丹羽池田四將為奉行也勢州者松

島城信雄賜武衛子孫津川玄蕃頭為南方
之奉行又神戸城賜信孝一腹之舎兄小島
兵部少輔為北方之奉行
氏郷記云柴田修理亮勝家羽柴筑前守秀
吉丹羽五郎左衛門尉長秀池田紀伊守信
輝四人天下ノ奉行トシテ改道行ハレケ

太閤記之行五條淺野弥兵衛尉長秀吉以

は臺所とありては、いかに、あつし、初見
才の固かりし、毎事の外、其評定の
中、よき事、ある者あり、其次、信忠、信子、事
へ、あつし、きこ、あつし、出づる、文阿、信忠、御、
才、あつし、信子、御、将、なり、は、あつし、立
あつし、あつし、と、撰、ひ、出、され、
か、を、長、束、女、羽、女、郎、左、門、尉、不、快、く、
あつし、の、裁、判、を、い、し、事、な、る、もの、也

増田石田、わ、北、郡、の、部、し、む、り、吾、に
才、を、い、し、り、増、田、の、事、損、益
小、曉、り、其、性、剛、を、石、田、の、諫、を、付、て
ら、吾、氣、色、を、い、し、事、な、る、を、好、し、
もの、を、い、し、り、の、定、り、前、田、徳
善、院、具、以、浅、野、彈、正、少、弼、増、田、右、門、尉、石
田、治、部、の、輔、長、束、左、藏、右、輔、と、い、し、事、
豊、臣、記、云、五、奉、行、ヲ、被、定、天、下、ノ、政、ヲ、執、之、

△其一ニ公徳善院僧正玄以ニ浅野彈
正少弼長政三ニ増田右衛門尉長盛四ニ
石田治部少輔三成五ニ長束大藏大輔正
家也中ニモ玄以ハ元來叡山ノ出家ナリ
シカ古城之介信忠公ニ咫尺シテ出頭無
雙御最期ノ時モ若君ノコトヲ御頼ミイ
カニモシテ守立申様ニ御生害ノ御供ニ
參シヨリハ此事一大事也ト細ト被仰

付シカハ無カ安土へ被下若君ニ付テ被
居シヲ元ヨリ才智學徳ノ聞エ有ケレハ
丹州亀山ヲ五万石被下奉行ノ上座タラ
シメテ寺社ノコトヲ司トリ候ハトナリ又
浅野彈正ハ殿下ノ御縁者ト云當家骨肉
ノ臣ナレハ禁裏仙洞ノ事務並ニ奥方ノ
裁判ヲセヨト也増田石田ハ殿下江州長
濱ヨリ近侍シテ朝暮勤奉公ノ旧功ヲ積

殊ニハ智勇兼備ノ聞ハ世以賞美ヤシカ
ハ立身無滞ニテ金吾ハ和州郡山ヲ二十
万石被下禮部ハ江州佐和山ヲ十九万石
被下其上兩人共ニ二十万石充ノ御預地
ヲ被仰付此二人ハ諸大名ノ取次天下ノ
法政ヲ司リ候ヘトナリ長束ハ元ハ丹羽
越前守ノ家老ナリシカ長秀死後ニ子息
長重國ヲ減セラレシ時大府ハ直參ニ被

召出長束ハ箕勤ノ工夫世ニ勝レ且学材
アリハトテ奉行ノ列ニ入ラル諸國郡邑
ノ廣狹天下ノ損益等ノコトヲ考ヘ候ヘ
ト也然レトモ公更沙汰世更トモ五人連
判可仕ト被仰付ケリ
天正事録云御花見ノ次第御催夥シキ様
躰也略中摠構ニ柵ヲ幾重モ結路次通ニ埒
ヲ結郡集ノ更ナル故摠構ヨリ町ハ御奉

行人増田右衛門尉初トシテ被仰付比々
まりとのいすゝるの事をもとけ書及後小引る信
云百餘元親百餘ボいれい行なりをよいなる
へいもい強いるい
しいもい強いるい

清正記云清正朝鮮の加藤小西朝鮮国の
都く押つた跡勢をよいのいなきと評定い匠
ぬれりち秀吉公御名代守兼多宰相秀家
并石田治部少輔増田右二門尉大谷刑部
少輔其の介日才坊着陣い加藤小西秀家

へ余候い帝王いといくい中い益いさいのい教いの手い方い紙
向い中いりいるい秀家い并い三いなりいありいうい好いけいるいわ
高森の帝王を生捕いふい所いもいしい道い筋いもいち
ついのいまいついへい記いといおい定いらいしいあい大い谷い吾い隆いのい
列いりいわいあいりいりいるい朝い鮮い出い軍いのい期い小い信いといていか
へいりいまいしいるいおいりいまりいのい候いをい常いといしい候い
増補家忠日記云慶長五年七月大神君ヨ
リ御書いうい義光いニい賜いルい急い度い申い入い候い治部少
輔い以い才い覚い方い々いへい觸い状いヲい廻いニい付い而い雜い説い申

りし是等不思儀と申事家ホ斗小限
ト為取付法ありに結句ニ此原英濃後何
其なぬと記法並也然と云もは二事
小か中なるわもりの境目武士道の法用
如之存とすまりをより中其後暫二
三月七候定まりし事英濃後何
公事此理每批判致すかきとの儀信
会公法上支海うもら

由良家傳記云法家中法度書之事諸事
行人番以組頭名出立の事有間敷事
長曾系部之親百り条云一國中七郡
之くまの立上も彼事り中付儀諸事不
可及異儀事付在る所ニ庄屋亦定置上も
万事解渡處毛以不可存後事一國中諸公
事之成寄親へお理以其上可言上之親を
之を奉り迄可申届事一立者之事並請

材木出等の時に出る所へ不_レあ_レ届_レぬ事
知行可_レる放直他國へ去_レぬ者親族共可_レ成
敗日被官せ_レ走_レぬ者其主人之増倍之可_レ成
科事一給_レ取_レ過上者奉行中へお理以其上
有_レ様可_レ引_レ申_レ急用之時も本軍役之外に
人_レ數お_レか_レう_レ可_レ勤_レなりへ重_レる_レ遂_レ理_レ公_レ役
可_レ引_レめ_レ有_レ様之事共一人を貳人引_レ事_レ停
止_レ事一他國へ上下共出入_レ事_レなり人

并老中判形年之者浦_レ山_レ一切不可_レ通_レ山
其_レ所_レ在_レ屋_レ浦_レハ_レ乃_レ祚_レ定_レ置_レ上_レ若_レ後
付_レ根_レ出_レ入_レハ_レ即時_レ方_レ之_レ者可_レ成_レ敗_レ事_レ證
據_レ船_レ乗_レせ_レぬ其_レ船_レ頭_レ迄_レ可_レ行_レ罪_レ科_レ事_レ
又_レ傷_レ之_レ事_レ雖_レ為_レ如何_レ様ノ子_レ細_レ為_レ傍_レ輩_レ打_レ擲
放_レ狂_レ可_レ成_レ敗_レ但_レ有_レ行人_レ可_レ為_レ各_レ列_レ事_レ
松原自休手録云永祿八年三州_レ敵_レ無_レ
人_レ依_レ之_レ為_レ三_レ奉行_レ定_レ置_レ本_レ多_レ作_レ左_レ衛_レ門_レ高_レ力

左近天野三郎兵衛
文祿四年御成記之家中諸大夫因元在
元何も法録通りしは禮や右進上物ハ法
方刀折紙法小袖也
按酒倉後の附しき評定引付のる氣
を置きしはし程の家司として命令
をまりするものを公事なり人と稱し
事ハまり入とのことなる也

是は評定まじりの候号ハもあはれ
かり候ししもとより又官の長たる故
に方町ハ又少堪つる京家の官人を招
きつは候ハえらばしきその候をせよ
替り赤祿ハ評定元を置き建長ハ
引付元を設くるものなり候なり
補もくつ族を以て其元ハ定女ら
しうハ評定元のりも政司同は評定の

執事引付頭人かと節をけり、掌のものと
の稱呼をかたじけなく、人とも稱き
、いづれ引付流政所同注可のあき人
等、つたなく、なかり、と、なほ、つら、り、也
、曰ま、り、く、と、ふ、中、の、各、階、級、の、あ、き
あ、う、つ、つ、も、政、務、の、席、に、列、せ、り、つ、所
に、を、ゆ、ゆ、し、国、用、を、充、てる、重、殿、か、は、
、引、付、え、る、あ、き、に、も、必、評、定、え、る、可、

入、る、家、族、の、あ、き、を、以、て、補、せ、り、つ、事、は、
、但、し、一、家、の、あ、き、に、限、り、つ、補、任、の、あ、き、は、
、例、の、あ、き、に、な、り、つ、は、例、外、の、あ、き、の、家、
、は、生、か、り、者、も、あ、り、つ、使、用、せ、る、れ、一、掌、あ、き、
、は、あ、き、を、其、才、に、あ、て、り、つ、あ、の、つ、つ、一、例、
、な、り、つ、評、定、あ、き、に、あ、て、り、つ、家、族、も、あ、き、
、に、あ、て、り、つ、補、任、せ、り、つ、事、あ、き、と、あ、き、の、あ、
、大、概、を、且、利、殿、の、時、に、あ、て、り、つ、あ、き、
、鑑、倉、の、あ、き、に、あ、て、り、つ、あ、き、の、あ、き、
、あ、て、り、つ、あ、き、に、あ、て、り、つ、あ、き、
、亦、其、准、據、を、し、を、知、り、つ、あ、き、

小沙汰より一事あり時、此等の如き
そのまはり小充り、事古今の通例なり
但武事のまはりも凡應永永亨の比より
以前にまはり、そのまはり、まはり
のこゝろ、事、應永前後より、
まはり、まはり、まはり、まはり、
事、まはり、まはり、まはり、
えは前未系えの二等ありは前未と

系、御評定始、小沙汰始、前には前被
を許さ、まはり、まはり、恩賞方な
り未系えと、政所問注所、のまはり、
し、但、人より引付、か、思
賞才の補を、間、為未系えの名、免
か、まはり、まはり、必は
前被、を許さ、まはり、未系
え、方、人、な、まはり、且、利、殿、の、

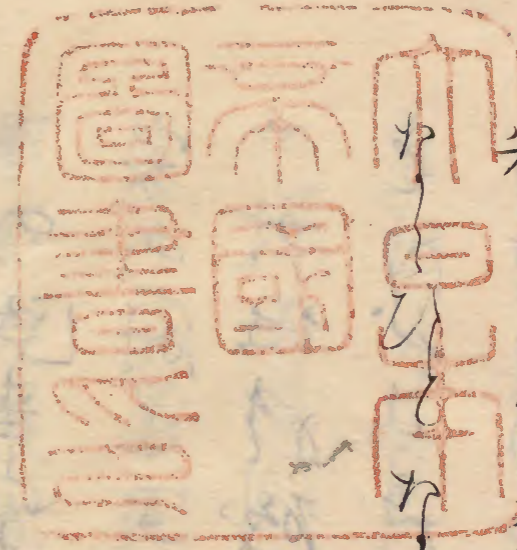
わ大名諸家が幕府の制にあはひて老
臣等次第の成を以てしとき
た進し其の中より一族老臣たるもの專
まはをりけりし有るが家の法
一採るは織田家覇業をたけよ及
ひてき器用を擧げなれしをりし
故小田原藩次の撰よ及るは進併時
運成きしし可なりし家老とを

先家別と別れし略あるを訴訟以
下の政事を治はさしとんえり豊
家の時よきし法制を備りし
大任成候と云ふと一ち老中老を
とらふべき全く古法を追きつり
あはれきともあつし後室河
の古風よかあしち老の執権評定ありて
中老より式評定あり
引付ありしはまきし以後大名諸家小
似たりしなり

明治十年十一月

木山西中
高杉脩造

武家名目抄第十五冊



七必老臣の次子なりとの殿を設け或は
しらすことを若家老若老中殿をりか
し
新しき老臣の事務をゆけり
かしらるる程

